



ComPas

当団体は立命館大学のBYOD推進のため、本学・他大学の調査を実施し、質の高いデジタル学習環境や機会を創出するため、活動しています。

BYOD(Bring Your Own Devices)とは？

BYODとは「自分のデバイスを持ち込む」という意味。学生が個人で所有しているスマートフォンやタブレット、ノートパソコンなどの端末を大学に持ち込み、正課授業や課外活動に活用する仕組みのことを指します。

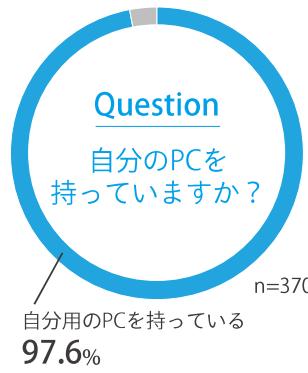
立命館大学のBYODを考え、推進する

学内BYOD調査・普及

理系学生のBYOD率が圧倒的な本学

春学期より新入生を中心に収集したアンケートより、以下のことことが判明しました。

- ・本学BKC所属学生のBYODに対する意識は非常に高い
- ・その一方で、どのようなパソコンを購入するべきかのサポートが不十分と感じる学生が約55%存在する
- ・パソコンを持たせざるを得ない状況を作り、完全なBYOD化を推進しています。



大学生活におけるパソコンの使い方を考える

学外BYOD調査

「無いものは無いで成功した九州大学」

九州大学は国立大学で初のBYODに成功した大学として、日本での大学BYODの先端的な事例として多く示されています。九大は大学の共用PCやプリンタを撤去することにより、学生が自身のPCを持たざるを得ない状況を作り、完全なBYOD化を推進しています。

九大近くで聞き取り調査を行うと、サポートが充実したApple Storeなどのオフィシャルショップが大学周辺に有る強みが明らかとなりました。



九大周辺のPCストアの様子

理系人材に必要な情報処理を身につける

プログラミング学習会

私達がBYOD調査を行うとともに、自分が理系人材としてどのようにPCと向き合って行かなければならぬかを考えるプログラミング学習会を不定期で開催しております。そこでは生命科学や経済、統計に関する研究でよく使用されるPythonをベースに学習を行っています。Jupyterやpandasなどを用いた統計計算に関する学習を行うことで、クリエイタではない人向けたプログラミング学習の必要性や、それを利用した仕事の効率化などを考えてきました。



Python勉強会の様子

生命科学部・薬学部 PEP PC購入ガイド 作成に協力

ガジェットライターなども務めた当団体の学生などがPEP教員と協力し、PC購入ガイドを作成しました。こちらは以下のQRコードから閲覧可能です。



2019年度
PC購入ガイドは
左のQRコードから



当団体が作成の協力した
PC購入ガイド2019

アンケートからわかったパソコンの購入のサポートの充実のため、具体例を示した冊子を鋭意作成中です。

春季視察予定大学・地域

広島大学・福山大学

- ・Bring Your Own Laptopを推進する広大の手法調査
- ・ノートPCの傾向調査
- ・旧型PCの持ち込み推奨案件



北海道大学・名寄大学

- ・Chromebook導入の調査
- ・導入PCと持ち込みPCの比率について調査
- ・北海道ならではのサテライト教育メソッドの調査



得たスキルを個々の活動に活かす

私達が学習したプログラミングに関する知識やPCスキルを利用し、それぞれの持つフィールドでこれを活かすことができました。例えば、子ども会などで、プログラミングした内容でbingoゲームなどを実行しました。これは、今後プログラミングが必修となる世代への貢献を行う第一歩と考えています。また、私達が実際に学習したことを実践する場所としても有効です。

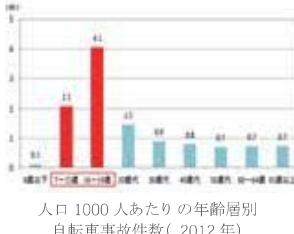


このようにBYODの促進だけでなく、参加した学生が自身の特徴となるようなPCスキルを習得できるような活動も継続し、学内のPCを利活用できる人材を育成していく予定です。

自転車事故防止 ANSHiN システム

ストーリー・メインプロダクト

7~19 歳の事故率が最多

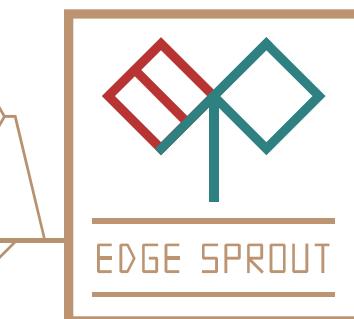


主な事故原因

- 運転者の不注意
- 不慮の事故（止まれなかった）
- 手放しなどの危険運転
- 運転者による操作の失敗

リサーチと調査

現地調査やコンテスト、ヒアリングなどの調査を元に、社会に還元することを考える



作成したデバイスを元に収集されたデータと公開データを用いることで、自転車から得られたデータを利用可能な形に変えていく。
(MaaSへの応用も考えられる)



得られたデータを元にモビリティ特有の情報の抽出・解析を行う。個人向けサービスも提供していく。

安心して手軽にモビリティを利用する社会を実現する

既存データ
・実験データ
・検証データ

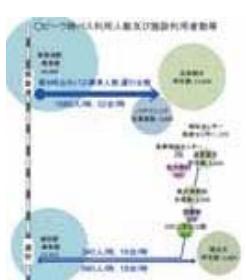
オープンデータ
・行政データ
・バスデータ

利用データ
・匿名収集した
利用者データ



ANSHiN システム - データベース
・自転車や各種モビリティデータ収集
・一般データとの組み合わせ解析

草津の新たな移動に



滋賀県が進めようとする草津市LRT計画を行なう上で、バスデータのみならず、競合する自転車データが活用できる可能性があり、これをつなげていくことで、安全な社会を目指す。



EDGE SPROUT

〒525-8577

滋賀県草津市野路東 1-1-1 立命館大学
びわこ・くさつキャンパス EDGE+R ルーム

info@edge-sprout.com

<https://www.edge-sprout.com>

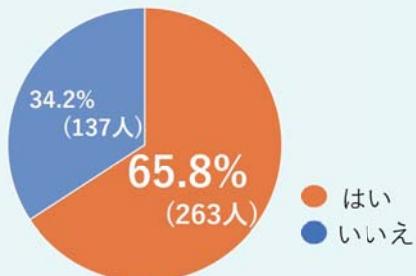
MaaS データに応用可能



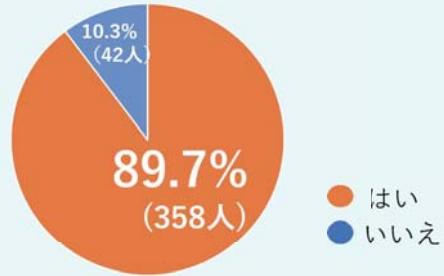
MariaNette

SDGsを軸として、学内広告の電子媒体化による紙資料削減と情報収集の利便性向上を図る。

立命館大学生400人を対象に独自のアンケートを取った結果、新入生に向けた新規勧誘のためのビラ配りは65%以上の人人が「無駄で仕方なく行っている」という意見が目立ちました。またインターネット社会でコミュニティが発展している中、大学中心として情報交流可能な場を望んでいる学生は9割にも及びます。アンケートの意見には現状では学内の情報を知ることが難しい、団体活動を知ってもらえるきっかけが少ないといった回答もあり、情報を受け取ってもらえるユーザインターフェイスが十分でないと感じました。これらの調査より、私たちは団体の情報を見てもらえるようにユーザが入りやすいプラットフォームを作ろうと考えました。



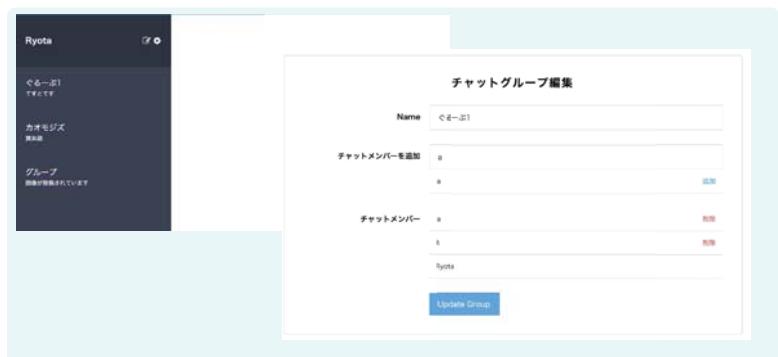
ビラを大量に配布することは資源の無駄遣いだと思いますか?



インターネット上でクラブ・サークルなどの課外自主活動団体の情報を発信・入手できるWebサービスがあるといいと思いますか?

開発とサービス

プロジェクト団体の意見協力により、団体と学生・地域社会が互いに情報発信を行える、“団体対人のコミュニティ”を広げるサービスの開発に取り組みました。各ユーザは好みの団体をリスト化し、団体活動に参加できます。



成果

本活動はすべてのサービスを実装することはできませんでした。しかしメンバー全員が企画する力と問題を投げ出さずに追う力を成長することができたと感じています。今後はフロントエンドを介した構築設計のもと、自分達の開発技術力を高めていこうと考えています。

今後の活動

MariaNetteの今後の活動としてはまず技術力と企業や地域との交流によるコネクション作りによる地固めとこのWebサービス開発の続行を試みています。

Health and Sports + R itsum eikan



ヘルスspo+Rは多くの人に健康を届けます

～活動テーマ～

「健康づくり」を通して人々の生活をサポートとともに、地域とのコミュニティ強化を図る。

大学での学び

理論 ↑ ↓ 実践

健康教室や体力測定の実施

HEALTH & SPORTS + R



健康づくりの行動変容を

～到達目標～

社会へ広める

健康の大切さ、重要さを伝え、行動変容をおこす

個人の成長

自らの社会的役割を意識することで、個人の資質・能力を高める



目標達成のための活動

～活動内容～

- ★健幸フェア
- ★みなくさ祭り
- ★甲良東小学校運動教室
- ★米原高校健康運動指導

⇒サルコベニア・ロコモ予防運動、コグニサイズ



HEALTH & SPORTS + R



近畿健康管理センターとの共同プロジェクト

～健幸フェア～

心身の健康について考え実践・体験できるイベント



ステージでの運動指導



ロコモチェック



自治体イベントへの参加

～みなくさまつり～

「素敵な未来の実現」の願いを込めた“地域発信型のまつり”



HEALTH & SPORTS + R



活動の成果～得たこと・学んだこと～

- ★自宅でもトレーニングができるよう、資料作りに努められた
- ★自治体のイベントに留まらず教育機関にも訪問するなど活動の幅を広げられた
- ★イベントを通して企業や地域の方との交流を深められた
- ★メンバーが個々の役割を理解し、円滑にイベントの企画・運営ができた
- ★常に学ぶ姿勢を持ちながら取り組めた



今後のヘルスspo+R

- ★地域や企業との連携を強化し、人々に健康に関する知識を提供
- ★ヘルスspo+Rオリジナルの企画を立案し、活動する機会を増やす
- ★団体登録者数を増やすとともに、知識の向上を図る
 - ➡健康に関するセミナーへの参加
 - ➡健康運動指導士の資格取得のために、定期的な勉強会の開催

ヘルスspo+Rは人々の健康な生活をサポートする活動に努めます

HEALTH & SPORTS + R



WE ARE WHAT WE EAT

団体紹介



[団体設立]2018年4月18日

[活動拠点]立命館大学 BKC

[団体代表]スポーツ健康科学部 3回 内田修次

[メンバー]理工学部・経営学部・食マネジメント学部

[活動テーマ]

農業を通じて、学生や草津市民、農家の方と
コミュニティを作り、農業に関心を持ってもらう
→一次産業は私たちの生活を支えている尊いものであるにもかかわらず、日に日に私たちの日常から遠のっている。この現状を少しでも改善したい。

振り返り & 拠角

農家訪問を通して、自分の農業に対する知識

のなさを痛感するとともに現状を知るきっかけ
になった。ファーマーズマーケットを通して、
いろんな角度から有意義な場を作れるように
伝える力を磨きたい



声をかけてみると、助けてもらったり、機会をい
ただけたり、行動に移すことの大切さを学んだ。
自分の知識不足、曖昧さを痛感したので、もっと
インプットアウトプットを増やしていきたい

団体を立ち上げてもうすぐ1年。様々な活動を
したことで団体と軸となる活動も見つけること
ができた。この土壤でそれぞれの花を咲かせる
ことのできるように、想いを汲めるようにして
いきたい



ファーマーズマーケット #草津小市



[日時]2018年12月15日

[場所]草津宿本陣周辺

[共催]草津まちづくり株式会社

滋賀の有機農家さんを自分たちで探し、
想いを伝え歩きました。そして、共感していただいた12の方々が出店していただきました。当日、会場には400人近くの人々が来場され、多くの方が生産者との会話を楽しむ様子が見られました。ただ、この活動は継続性が大事だと
考えているため、4月から定期開催を予定しています

くさつ Farmer's Market

[日時] (6月から)毎月第三土曜日

[場所]草津川跡地公園 de 愛ひろば



“ファーマーズマーケットを通じて、人間らしい本来の豊かさを創造”



プレ開催決定

4/20(Sat.) 10:00~15:00

@de愛ひろば



FB+1とは?
科学的根拠に基づき、幅広い世代に対して
運動指導やイベントの企画を行っている団体です！

2018年度 活動内容

- ・キッズアス
- ・O時限運動
- ・Sustainable Week
- ・立命の家
- ・部活応援企画

団員 32名



キッズアス



幼児～小学生を対象にコーディネーショントレーニングを用いた
運動教室を毎月開催しています。
子どもたちと楽しくふれあいながら運動を行っています。

O時限運動



スポーツ健康科学部の1回生と一緒に
春セメスターの早朝、週に1回、運動しています。

活動成果と今後の活動

- ・指導の難しさと楽しさを発見！！
→指導能力向上&キッズアスのパワーアップ
- ・低年齢、若者層に活動が偏った。
→親御さんなどを対象にした活動の企画
- ・キッズアスの企画継続が1周年を達成
→今後もO時限運動とともに、持続可能な組織体制の確立。

立命館大学スポーツ健康科学部



(KumamotoをSportsの力で1つに)

スポーツを通じて
『人とのつながり』
の構築の
手助けをする

新体制へ。

復興の
お手伝いが
したい。

○活動内容

全体会議



メンバー全員で
活動内容・場所
についての会議
を行います。

班活動



各班に分かれて
現地の調査や現
地活動に向けて
の準備を進める。

現地活動



現地にて運動教
室などを通して
地域の方と交流
を行う。

夏の大遊び大会

2018年8月1日に熊本県阿蘇郡西原村にある西原村構造改善センターにて交流を目的としたイベント『夏の大遊び大会』を実施した。地域の子どもたちが参加してくれました。



岡山現地活動

2018年11月25日に岡山県倉敷市にて一般ボランティア活動を行った。家屋の掃除など様々な作業に取り組みました。



熊本・福岡現地活動

2019年2月5日に西原村と福岡県朝倉市にて現地活動を行いました。朝倉市では今後の活動の必要性を調べることができました。



活動の成果

西原村のみでの活動ではなく
今年度は新たな地域での活動を試み
た。そのため現地活動の回数が少な
くなってしまったが、他地域の調査
や現地訪問を行う中でKS1の新しい
カタチを見つけるきっかけになった。

今後の展望

KS1結成当初からの計画であった
西原村での1年間の活動が終了した。
そこで今後は西原村での活動に加え、
岡山・東北での一般的なボランティア
活動もしていく予定である。

○インフォメーション



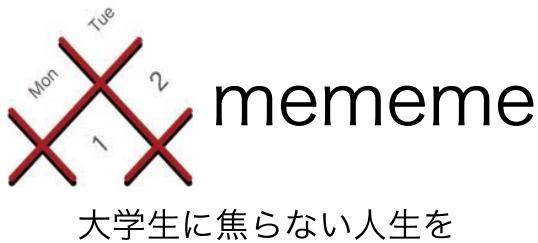
ks1ritsumeikan@gmail.com



@KS1ritsumeikan



m.facebook.com/KS1ritsumeikan/



mememeについて

私たち mememe は、忙しい大学生のためにちょっとした時間短縮を提供する団体です。様々な活動をしている大学生を応援し、貴重な大学生活を有効活用してもらうことをテーマとして活動しています。

活動内容

団体のコンセプトである「大学生に焦らない人生を」を提供するために、私たちは立命館大学の学生のためのスケジュール管理アプリケーションを開発しました。

活動の成果

立命館大学のびわこ・くさつキャンパスで広報活動をすることで、多くの人々にインストールしていただき、彼らの生活に貢献することができました。

まだ未完成な部分も多いためユーザーに指摘することもありましたが、アプリケーションの内容としては需要があることがわかりました。

今後の活動予定

ユーザーの声を聞いた結果、アプリケーションの改善点がたくさんあることがわかりました。これらを改善し、大学生にさらなる時間短縮を提供できるように今後も活動していきます。



▲ 開発したアプリケーションのスクリーンショット

1. 活動背景

CFAとは、世界の金融界で通用する投資専門の資格です。世界では約12万人の会員が活躍していますが、日本では資格保持者は少なく1,000人程度です。CFA協会リサーチ・チャレンジとは、各大学のチームが企業分析を行い、その調査・分岐内容の優劣を競うコンテストです。世界各地約1000校、5000人以上の学生が参加しています。金融のプロがメンターとして指導してくださいます。また、レポート、プレゼン、質疑応答すべて英語で行われます。

なぜリサーチ・チャレンジなのか？

Excellent experience

- 高い目標にコミットし、チームで成し遂げる経験
- 海外で、英語でのプレゼンテーションの経験
- 企業分析、引いては意思決定のためのリサーチ経験
- 国内、世界の同世代の最高レベルの学生と競争できる経験
- プロフェッショナルからのアドバイスを頂ける経験

High reputation

- グローバルなプロフェッショナル資格であるCFAが主催
- リサーチ・チャレンジで結果を残すと、様々なオファー

Chance to win

- オナーズプログラムよりリーダーシップとリサーチ能力が高い学生でチームビルド
- 2年前と3年前の優勝チームに所属している

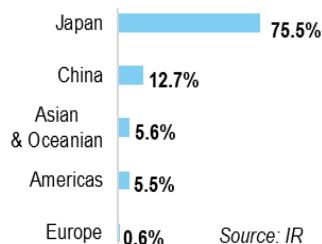
4. TOTOの分析

分析対象企業はTOTO株式会社でした。レポートでは以下の項目を記述し、1年後の株価を算出しました。

レポートの項目と点数

項目	点数	内容
Investment Summary	20	キードライバー 業績を引っ張る要因
Business Description	5	会社の沿革、事業内容(セグメント、ビジネスモデル、製品)
Industry Overview & Competitive Positioning	15	業界の概要・動向、会社の競争力・業界でのポジション
Financial Analysis	20	財務分析、財務指標の経年・他社比較
Valuation	20	DCFによる企業価値評価
Investment Risks	15	投資の際に考えられるリスク
Corporate Governance	5	会社の管理・運営・監査体制の評価
Total	100	

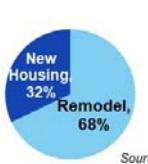
地域別住設事業売上比



[Investment Summary]

3つのドライバーがあります。1つめは日本のリモデル比の増加、2つめは中国の富裕層の増加、3つめはアジア・オセアニア地域の成長です。

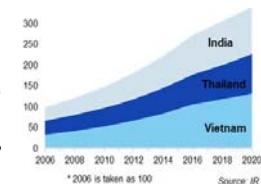
日本売上構成比



中国の富裕層増加率



ベトナム・タイ・インドの富裕層増加率



2. 活動目標

CFAリサーチ・チャレンジ
国内大会で優勝する

3. 活動内容

トレーニング > レポート作成 > プrezent > 練磨

7月
オンライン
説明会

8月
キックオフ
MTG

9月
IR
MTG

12月
チャレンジ
ファイナル

3月
アジア・太
平洋大会

5. 活動の学びと今後

得られたもの



[Industry overview & Competitive positioning]

衛生陶器業界は建物の着工数に影響を受けるため、発展途上国に大きなビジネスチャンスがあります。その中でTOTOはアジア、特に中国に着目して事業展開しています。

[Financial analysis]

日本国内の競合他社の平均のROICと比べて、TOTOのROICは3倍高いです。

[Valuation]

DCFを用いて企業価値評価をおこない、買いの推奨

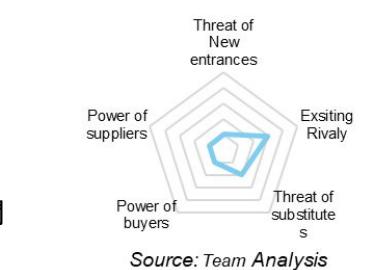
[Investment risks]

主なリスクとして、中国での競合他社との価格競争と世界全体の景気変動を挙げました。

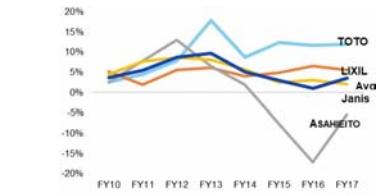
[Target Price]

以上より、1年後に5152円と予測 (9.3%増加)

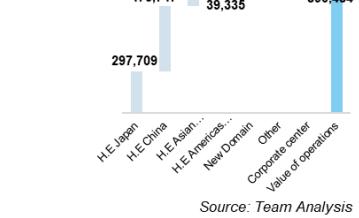
中国の5force分析



TOTOと競合他社のROIC



事業価値



立命館大学 学びのコミュニティ集団形成助成金 成果報告

地域を支える次世代リーダーの育成モデルの設計

R RITSUMEIKAN

立命館大学 Tabiwa +R 渡邊 里々子・戸簾 隼人

はじめに

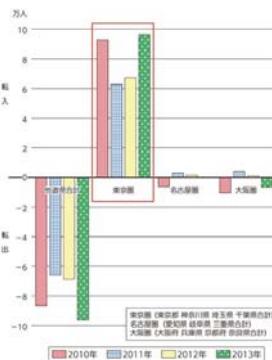


図1. 東京に集まる若者と地方から出ていく若者(2015. 総務省)

現在の日本の若者は三大都市圏、特に東京への転入傾向が非常に多くなっています。この変化は諸外国と比べて非常に高いです。実際に上京する学生10名にインタビューを行ったところ、その殆どが「滋賀では大企業などで働くところが少ない」「自分が活躍できるような場所がない」といった意見でした。これは、当団体が現地調査した茨城県での課題とも非常に似通ったものです。

このような若者の自己表現のフィールドが地方に少ないという課題を解決するため、SDGsへの取組を通じた文化などを伝承する仕組みをもととした、地域を支えるリーダーモデルをSDGsを介して設計し、若者の意識変化を促すことが本活動の目的です。

検証結果

検証を実際に4ステップごとに行い、その地元資源やその土地が持つ歴史的背景などの特性を活かし、SDGsを通じて中学生・高校生自身が考え出し、これをプロジェクト化できました。なお、当活動はNPO法人グローバルの学びのコミュニティ・留学フェローシップ、立命館大学 Sustainable Weekとの協働活動で行いました。

滋賀キャンプマイプロチャレンジ IN 立命館

滋賀キャンプは、滋賀県の中高生を対象に、農業やまちづくりの現場での実践的な地域学習を通じて自分が探求したい社会テーマを模索し、自分だけのプロジェクトを生み出し実践するプログラムです。今回は大学生と地域の実践者とのプロジェクトを共創し、生み出したアシニアを実際にSustainable Weekで実現してみることになりました。



図3. 検証段階において、実際に自分のプロジェクト(マイプロ)を発表した3人の生徒(ポスターより抜粋)

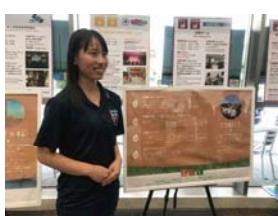


図4. 高校生によるプロジェクト成果報告の様子

また、参加した生徒にインタビューを実施したところ、以下のような答えが得られました。

- ・このような活動を高校ベースで行いたい
- ・地域資源を様々な場所に住む人に理解してもらいたい
- ・今の地元に何が必要か知りたいなど

検証方法

検証のために我々は以下の4つの段階を経て、そこから得られた意見をもとに考察と提案を行いました。また近江八幡市は、以下の段階ごとに必要となるステークホルダーや施設を有している上、地元への貢献意識が強いが実行に移したい生徒が多くいたことなどから、今回の調査フィールドとしました。

1. 高校生たちの地元に対する理解を助長する
2. 高校生たちが地元の何に、何で活躍したいかを決める
3. 自身が活動をしてみたいことの先駆者と協業する
4. これらを成果発表して、何が滋賀に必要かを考える



図2. 検証で実施した4段階の学習プロセス

考察・提案

個人で身につくスキル



今回の検証に参加した生徒へのインタビューや大学でのSDGsに取り組む学生のアンケートからわかる傾向をもとに、SDGsで育つ個人スキルを検証の際に共に取組を行ったSustainable Weekと協力しながら作成しました。本スキルを確認していく中で、今回実施した検証では参加者自身に影響を与え、キャリアアップに繋がる力が育つ傾向がありました。

図5. 検証やインタビューからわかる個人のSDGsスキル

また、エコツーリズムの視点から見る自己認識によるリフレーミングを行うことで、地域が持つ既存資源の新たな価値を見定める能力が身につきます。このような価値創造を行える人材が暮らしからエコツーリズム、ひいては地方の活性化につながると考えています。

今後の展望

- ・高校生プロジェクトの継続支援
- ・開始プロジェクトの増強
- ・地域資源に誇りを持つ若者の育成
- ・SDGsスキルの普及、改善

人生100年時代における”豊かさ”とは？

目的：人生100年時代において、本当の”豊かさ”とは何かという問い合わせを考えていく場をつくる

背景：スマホの普及・テクノロジーの進歩による急激なライフスタイルの変化

【過去】 消費 働き方



【現在】 消費 働き方



消費

【未来】



スマートフォンの普及

AI・ロボットの普及

過去の価値観・常識が崩れ、予測不能な時代がやってくる

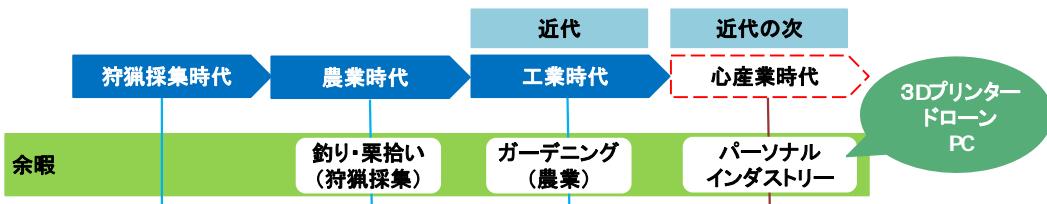
活動内容：少人数による講演会の開催

【プレゼンター】



アミタホールディングス株式会社 代表取締役 会長兼社長
熊野 英介(くまの・えいすけ)

新しい時代とは、感動の共感を生産する進化したマニュファクチャーティーである



大量生産がもたらしたもの：モノの民主化
幸せの基準 =「消費と所有」
人との関係性に無関心な人間
人間関係資本が経費

AIがもたらすもの：思考力の民主化
幸せの基準 =「共感と関係性」
人との関係性の中に価値が生まれる
人間関係資本が資産

感動の共感を生産する進化したマニュファクチャーティーとは、脱画一化・脱低価格化の時代

安定社会
「モノや金を持ち安定するから安心した」



信頼社会
「不安定でも信頼関係があれば安心する」

信頼関係を築くために自らのメッセージを発信することが重要である

結論

本当の”豊かさ”とは何かを考える前に自分が発信したいメッセージとは何かを考えることが“豊かさ”的本質に迫るために重要である

今後取り組みたいこと

哲学や歴史観から自分が発信したいメッセージとは何かを深堀りできるような場をつくりたい



REFLE.プロジェクト



団体概要

団体名 / name

REFLE.プロジェクト

設立 / foundation date

2016.08.

構成人数 / member

7人

団体理念 / philosophy

①→1.1(新しいモノを創り、誰でもマネできるようにテンプレ化する)

活動目標/our goals

大学生・高校生のキャリア選択の幅を拡大させる

活動実績 / results

2017年度立命館大学学生部長表彰(団体)

活動事例・成果

1

長野大学夏季集中講義にて活動紹介及びワークショップ開催

今身近に感じる社会課題と自分自身の興味関心をマッチングさせ、自分がこれから何をしていくか考える機会を提供できた。

2

SDGsファシリテーター養成講座開催

長野大学でのワークショップの際に感じたファシリテーション能力の不足を補うとともに、高校生にも分かりやすいようなワークショップ開催へ向け開講している。
(2月現在)

今後の活動

今年度の活動目的を継続することはやめて、メンバーなども刷新して新しい団体にする予定。今年度行ったSDGsファシリテーター養成講座を引き続き開催することや、SDGsに関する勉強会を実施することも考えている。(2月現在)

▼ 各企画の様子



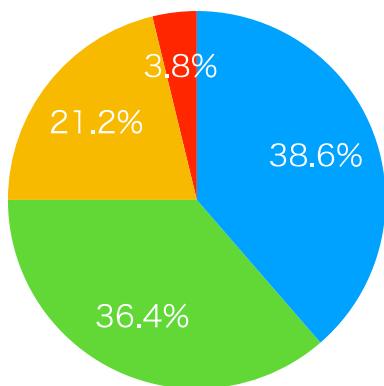


活動目的

大学生のためのイベントを共有するためのサービスを開発及び運営する事で,社会の人々が作り出すイベントの認知度を上げる第一歩として,立命館大学をターゲットにし,学生主体のイベントの認知を広げ,その活動や内容を広く知ってもらうこと,またそれに伴う,学生の正課外,正課内での満足度を向上すること

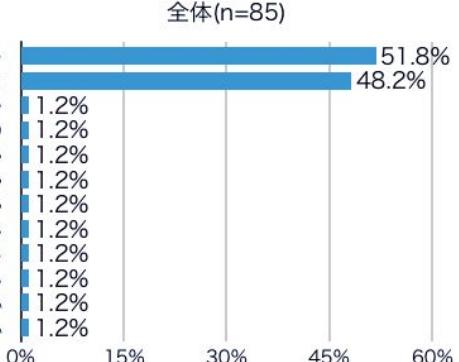
● よくある
○ あまりない
● ある
● ない

全体(n=132)



立命館大学のイベントが、知らない間に開催されていたという経験はありますか？

サークルイベントのような興味のあるイベントがmanabaにないから
興味のあるイベントがmanabaにあるが、表示されているものが文字ばかりで見逃してしまう
そもそもmanabaをあまり見ないから見逃してしまう
manabaの通知が、不必要的ものが多い(他生徒の掲示板コメント)
イベント確認するためにmanabaを見ている訳ではないから
そもそも学内でのイベントに部活で参加できない
そもそも参加する気がない
manabaがそもそも前のような使いやすさを失っているから
イベントに興味がないから
頻繁にmanabaのイベントが載っているところを見ないから
manabaにイベントが載っている事を知らない
manabaにイベントが載っている事を知らない



学内のイベントを見逃してしまう理由はなぜですか？



活動の成果

今年度の一番の成果はWebアプリ「Soda」をリリースできること。またアプリを作っていくことの面白さや大変さを知ることができ,ソフトウェア開発の知識や経験を得ることができた。

活動内容

[4月・5月] デザイン案となるモックアップの作成

[6月] アプリ作成のための勉強

[7月・8月・9月・10月]

アプリのフロントエンドの開発

[11月] バックエンドの開発と統合を行い完成

[12月・1月] 広報活動,アプリの改善

これから

これまで以上に,掲載するイベントの充実,イベント掲載に協力してくれる団体の確保,立命館大学生への認知拡大を行なっていく。その後,立命館大学外の大学や組織にもアプローチをし,イベントを集め,地域コミュニティの形成を促進していきたい。

STROPS

スポーツ教育を通じて、開発途上国の子どもたちの可能性や夢の選択肢を広げる。

私たちが開発途上国に目を向ける理由

開発途上国では、識字率の低さに表れているように教育が行き届いていない現状がある。中でも、カンボジアはポル・ポト政権下で、教育者をはじめとした、有識者たちが虐殺された。また、その際に書物も大量に処分されたため、農村部をはじめ、識字率が低くなっている。また、開発途上国での教育では、就職に有利なスキルに関する教育は熱心に行われているが、スポーツ教育は軽視される傾向にある。

そこで、私たちは国連で採択されたSDGs（持続可能な開発のための教育）をもとに発展途上国で軽視されているスポーツ教育の価値をカンボジアの人々とともに高め、スポーツ教育を通して人材育成の一助となりたい。そして、スポーツ教育によって、子供たちの夢の選択肢、可能性を広げたいと考えた。



STROPSの活動内容

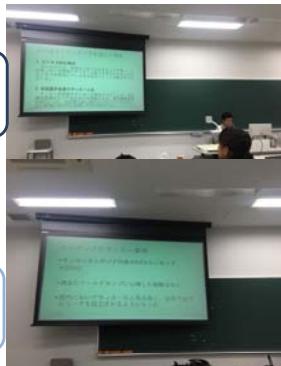
月1勉強会とは？

この勉強会では、カンボジアについて広く知識を身につけ、カンボジアにおいてスポーツ普及を行なうために何をすればいいのかを考えることを目的としている。

毎月1人、カンボジアなど発展途上国について興味を持ったことを調べ、発表する。

(例)・カンボジアのサッカー事情
・カンボジアの教育事情 etc.

そして、発表のどこかで3人1組程度のグループになってディスカッションをし、自分たちには何ができるのかというなどを考えている。



STROPSの活動目的

開発途上国における子どもたちへの
スポーツ教育を通じた国際貢献のあり方についての実践的研究

開発途上国における
スポーツ教育の現状や地域での問題を知り、理解を深める。

開発途上国のニーズに寄り添う支援の在り方を考え、実践する。



カンボジアプロジェクトに向けてのグループでの取り組み

目的：①スポーツの価値が日本のように認められていないカンボジアでどのようなことをすれば価値を創造できるのかを考え、来年度に実施していきたいプロジェクトを考えること。
②スポーツに打ち込んできた経験がある私たちだからこそ、スポーツ健康科学部だからこそ強みを生かして、できることは何かを考えること。

カンボジア内におけるスポーツの現状や価値をしきただけでなく、子どもの教育現状、カンボジアの特徴なども知ることによってスポーツをどのように活かしていくのかを考えられるようになった。

ディスカッションの時間を取り入れることによって、それぞれが自分の意見を持ち、発言することで様々な考えに触れることができ、カンボジアのスポーツ環境の改善に力を入れることが出来ている。

これらの他に、聞いてもらう人にどのように伝えるか、どのように工夫すれば理解してもらいやすいかななどといったことまで考えられるようになった。

現在、年末にカンボジアに行ったメンバーから、村の小学校の現状や各班ごとに考えたプロジェクト案に対するフィードバックを受けている段階である。大きく変わるとしては、班ごとのプロジェクトを行うのではなく、メンバー全員で1つのプロジェクトに取り組むことだ。1つのプロジェクトに対して、メンバー一人一人の視点で向き合い、意見を共有することによって、より質の高いプロジェクトを目指していく。さらに、こうしたプロジェクトの見直し&改善を毎年継続し、より質の高い持続的なプロジェクトに取り組んでいく。

メンバーがそれぞれ考えてきた案

- ・体づくり運動教室
- ・現地の子どもたちの保護者や村の人を巻き込んだ運動会の実施
- ・カンボジアで人気のサッカー教室
- ・トップアスリートの感動プレーを動画にまとめて、子どもたちと観賞会
- ・日本とカンボジアのスポーツ文化交流会の実施
- ・コオーディネーショントレーニングの指導テキスト作成
- ・現地の教員とのディスカッション



*2019年度のSTROPSカンボジアプロジェクト案（仮）

・仲間と体を動かすことが楽しいと思える運動教室の実施。
■子どもたちの「もっとやりたい！」という感情を引き出す。
■仲間と体を動かすることで協調性を身に付ける。

・体を動かすことの意味を理解してもらえるようなテキスト作成。
■社会性を身に付ける手段として、体を動かすことは有効であることを示す。
■物を使わなくともおこなえる体づくり運動を中心としたものにする。
■運動1つ1つにどのような教育的価値があるのか、その運動を目的を示す。

カンボジアでのスポーツ教室の開催

目的：言葉が通じない中で私たちに何ができるのか、カンボジアの子供たちはどのような反応をするのかなどを来年度のカンボジアプロジェクトに向けて確認すること。

内容：農村地域の小学校の約200人の生徒を対象に、スポーツ教室を午前と午後の2部制で行った。ラジオ体操、コオーディネーショントレーニング、長縄、馬跳び、ムカデ競走、人間椅子を中心に企画した。これらの一環を、水上学校やコミュニティスクールでも実施した。



気付いた点

コオーディネーショントレーニングを中心とした運動を実施する中でリレーや足じじゃんけんといったルールを伝えるのが難しく言葉の壁を感じた。しかし、一人に伝わると周りの子にも伝わった。事前に決めたルールを押し付けるのではなく音楽や、縄跳びのロープなどの道具を使うことで興味を引くことができた。

また、他の人と競争する競技よりも、縄跳びの回数や全員での人間椅子など目標を達成する競技の方が人気があった。準備体操や体操服はあり、日本の体操服よりもデザイン性に優れており自然と着たくなるデザインだと思った。「楽しさ」、「新しさ」に重点を置くみんな進んで行動してくれた。

来年度のSTROPSについて

2019年度の活動目標

- ✓ スポーツ教育によってカンボジアの子どもたちの可能性や夢の選択肢を広げる。
- ✓ 子どもたちの可能性や夢の選択肢を広げる活動を通して、自分たちの視野を広げ、多様な価値観を認められる人になる。

2019年度の活動内容

- ✓ 仲間と体を動かすことが楽しいと思える運動教室の実施@カンボジア（2020年3月予定）
- ✓ クメール語で模擬授業
- ✓ 途上国コンペの実施
- ✓ 体を動かすことの意味を理解してもらえるようなテキストの作成

今年度の振り返り

今年度のSTROPSの活動としては、「月一勉強会」を中心として知識を養い、実際にカンボジアで運動指導を行うことができた。月一勉強会では、SDGsについて、世界で活躍する人々の考え方やスポーツ指導への意義、ボランティアとは何なのかなど様々な面からのアプローチを行うことができた。しかし、カンボジアでの運動指導を行い、自分たちの運動指導への知識や技術のなさ、そして言葉の壁を痛感した。また、持続的かつ意味のある活動にするためには、更なる工夫が必要だと考え直すきっかけにもなる1年だった。





2018年度学コミ活動報告

SOIL&SOUL



これまでの活動



南草津駅前にあるアーバンデザインセンタびわこ・くさつ(UDCBK)で毎月(18年1月～)開催
ボードゲーム交流会

子供から大人まで多くの地域の方々に楽しんでもらえました。
ボドゲを通して、
大学生と地域の交流場を提供しました。



計画



目的

- 「草津市」を舞台にしたボードゲームや SDGs に関するボードゲームの開発
- 開発したボドゲの体験とともに 「草津のお土産」として提案すること



UDCBKでの毎月の活動の様子

「SDGsを知る・理解する・深める」というテーマのもと、多くの方に遊んでいただいた**SOIL&SOULのボドゲ「SDGsポーカー」**特にテーマが「知る」のボードゲームは小学生でも楽しく遊ぶことができ、SDGsの認知度向上に貢献できた



Sustainable Week 2018イベント



オリジナルボドゲ「SDGsポーカー」

Sustainable Week 2018実行委員会と協力して、立命館大学3キャンパスに赴いて、**ボドゲワークショップ**を実施！

様々な人たちとの繋がりがボードゲームを通じてひろがっていくことを感じた。

これから

制作したボードゲームをクラウドファンディングなどを用いて商品化

TipTrip

代表：神原良継
副代表：河原田柊来
会計：芝崎星太

団体紹介

私たちTipTripは「京都の観光を今までよりもほんのちょっとだけ楽しんでもらう」をコンセプトにしたスマートフォンアプリケーションサービスを開発する団体です。アプリ開発に必要な技術や知識だけでなく、観光についてやマーケティング、ブランディングにも着目したスマホアプリ開発団体です。

アプリの説明

解決したい課題

京都に来たのはいいけど、結局どこがいいのかわからない

解決策

- 選択肢を少なくする
- 遊び心を取り入れる

アプリのコンテンツ

自分で簡単にツアーが作れて、作ったツアーをアプリがガイドしてくれる！！



①地図からメインとなる観光地を選択する



②選択したメインとなる観光スポット周辺のスポットを一旦「ご飯、遊び、観光」の三つに分類する



③. メインとなる観光スポット周辺のスポットをTinderのようなUIで簡単に選択する



④. アプリがツアーを作成し、ルートが表示される

進捗状況

β版が完成した状態ですが、まだリリースはできません。

学んだこと

私たちはこの一年を通して、アプリを開発する技術だけではなく、開発を行う上でどのようにチームを運営していくか、プロジェクトが円滑に進むのかということについても学びました。

今後の動向

今後はユーザ間でツアーのルートをシェアしてランクをつけてたりや、外国人向けにも開発をしたりなど、どんどん拡張機能を追加していきます

STEP -Science & Technology English Presentation-

連絡先: stepbkc@gmail.com

団体概要

STEPは2017年度にBKCに通う学生7名で設立された団体で、国際社会で必要とされる人材になることを目標に多方面で様々な活動を行う団体である。メンバーは現在3回生1名、2回生5名、1回生8名の計14名である。具体的な活動内容は、小中高生への英語プレゼンテーションの指導とともに、国際社会の課題解決策を考える機会提供、さらには全国学生英語プレゼンテーションコンテストへの出場や、STEP独自で企画する海外研修などを実施している。

活動理念

STEPは3つの活動理念を掲げている。第一に英語運用能力の向上である。国際社会で必要とされる人材になるには英語運用能力の向上は必須であるので1つ目にこれを掲げた。第二にプレゼンテーション能力の向上である。これは第一の理念と同じ理由である。第三に教育に携わり未来人材育成の一助となることである。持続可能社会の形成には未来人材への質の高い教育が必要である。我々にできる形で未来人材に知識を提供することを3つ目の理念とした。

小・中学生英語プレゼンテーション会

SustainableWeekでの小中学生英語プレゼンテーション会では、立命館小学校の生徒4名と立命館中学校の生徒2名によるSDGsに関するプレゼンテーションを一般の聴衆の方々の前で実施した。



認定証授与後の写真

3ヶ月以上かけて一つのプレゼンテーションを作り上げるという体験を通して、小・中学生は英語プレゼンテーションの楽しさや、課題解決の思考ロジックを理解することが出来た。また、2年連続参加してくれたた

生徒もあり、活動の継続性が見えてきた。普段の授業では経験することのない環境での発表に戸惑うことも見られたが、今回の経験を通して今後小・中学生たちがどのように成長してくれるかがこの企画を実施した本質的な意義であると考えており、参加者の成長のきっかけになるべく本企画を実施した。

知って、作って、アジアの現状

OICで開催されたAsiaWeekでは、メンバーが大学で学習している知識を利用し、アジアの課題に対して解決策を考えるワークショップを実施した。本企画は二部構成となっており、環境問題について考える第一部と、急速に進化するIT技術に触れる第二部で実施した。



参加者が環境問題について考える様子



プログラミングを学ぶ参加者の様子

第一部では、環境問題に関するカルタを自分たちで作ることを通じ、環境問題を身近に感じ、当事者として問題意識を持つことを目的として活動を行なった。

第二部では、グラフィカルにプログラミングできるツールを用いて、キャラクターを動かすプログラミング教室を開いた。プログラミングに対する苦手意識を避け、IT技術に触れる機会を提供した。

全国学生英語プレゼンテーションコンテスト

全国学生英語プレゼンテーションコンテストとは、日本全国から600組を超えるプレゼンターたちが応募する日本最大規模の英語プレゼンテーションコンテストである。昨年度に続き今年度もSTEPから2グループ二次予選に進むことが出来た。また、昨年度の結果からさらに躍進し、今年度は1グループがTop 50に入賞を果たした。団体として、英語プレゼンテーション技術向上の基盤が構築できていることを示す結果となった。今後はさらに上を目指し、団体内から最優秀賞獲得者を輩出できるように切磋琢磨していく。



また、全国レベルの質の高いプレゼンテーションの観ることで得たものも多く、団体内でそれらを共有することで団体の質の向上にも繋がった良い機会であった。

二次予選に出場したメンバー

今後の展望

次年度からは、学友会登録団体として活動を行う予定である。団体としても3年目の活動となり、今後成長のために乗り越えるべき課題も徐々に明確化してきた。さらに団体の規模も徐々に拡大している状況であり、さらなる課題が見つかる可能性も示唆される。いかなる状況でも全員が団体の活動理念を共有し、同じ目標に向けて切磋琢磨することができる万全の環境づくりが重要となると考えている。よって、今後もより多くの新しいことに挑戦し、刺激を受けながら、メンバー間で成長のきっかけを生み出すことができるシステムの構築をしていくと考える。また、これまで実施してきた企画もさらに質を高めるためにはどうすればいいのかを深く議論し、団体として社会に対しより良い影響・価値の提供をすることができるよう運営していく。継続的に何が課題であるかを明確化した上で、着実に成長できるように、団体内での議論を欠かすことなく新しい体制でさらなる飛躍を目指す。



Profile

【活動目的】

情報セキュリティに関する知識や技術の修得を図ると同時に、それを周囲に広めることで情報セキュリティの分野に興味関心を持つ人材の増加を目指す。

【設立趣意】

近年、サイバー攻撃による被害が増加する一方で、セキュリティ人材が不足しています。サイバー攻撃に問題意識を持つ学生がセキュリティに関する技術に興味を持ち、これを学び合う学生同士の場を求めて、集まりました。

【設立】

2016年11月23日

【活動内容】

- ・毎週2回の活動（輪講形式）
- ・オンラインCTFへの挑戦
- ・全国各地で行われるサイバーセキュリティに関する勉強会への参加
- ・情報セキュリティ分野に関するイベントの実施

【活動目標】

CTF大会での上位入賞を目指す
情報セキュリティを互いに学び合うコミュニティとして存在する

What's CTF?

CTF(Capture the Flag)は、サイバー攻撃の対象となる機密情報をフラグに見立てて、それを見つける技術力を競い合うコンテストです。コンテストでは、与えられたプログラムを解析したり、指定されたwebサイトを攻撃したりすることでフラグを見つけます。CTFで与えられる課題の種類は暗号や通信、プログラムなど様々であり、幅広く、高度な技術力が求められます。

Why CTF?

私たちは正課の中でオペレーティングシステム(OS)、コンピュータネットワーク、計算機アーキテクチャ、暗号などの幅広い分野について学んでいます。学んだとこをより実践的に試す方法のひとつとしてCTFに取り組むことで、さらに高い技術力と深い知識を修得することができると考えている。

Achievement

2018.5	SECCON Beginners CTF
2018.7	セキュリティ・ネットワークコース特別イベントへの参加
2018.7	学びのコミュニティ集団形成助成金 採用
2018.10	SECCON CTF Online 予選 281位
2018.11	RiSTxKDL共同イベントの実施
2019.2	Attack and Defense in Sendai

昨年に引き続き、団体内での勉強会を継続し、Online CTFにも積極的に参加した。それに加え、今年は、学内でイベントを開催するなど団体外へ我々の活動を発信していくことができた。



RiSTx KDL共同イベント (2018.11)

学生主催のSDGs体験型イベント

Sustainable Week 2018



Sustainable Week 2018のポスター



【活動目的】

大学を核として、周辺地域をまきこむ増殖型SDGsエコシステムを創造すること。

【活動内容】

立命館大学びわこ・くさつキャンパスを小さな地球に見立て、学生自身が学生団体で普段行っている活動が社会課題解決にどのようにつながっているかを各自で解釈し、SDGsの17の目標達成に向けて体験型の企画を行う初の学生主催のSDGs体験型イベント「Sustainable Week」を2017年の10月1日～10月6日に開催した。

今年は、私達学生がSDGsを引っ張っていくリーダーとして、自身の持っているスキルやマインド・システムをキャンパスを軸に人から人へ伝えたいこうという思いを込めた「We are SDGs leaders.」を今年のテーマとし、2018年の10月14日～10月16日に「Sustainable Week 2018」を行った。

【今後の予定】

これまで学生、地域の方や行政・企業と共に企画を行ってきましたが、零年度は教職員や校友も巻き込んでいきたいと考えています。

SDGs認知度90%の大学へ

日本のSDGs認知度は約15%

電通は2018年1～2月にSDGsの認知度調査を行った。その結果、日本のSDGs認知度は14.8%であり、男性の認知が高く、特に男性20代では3割を超える(32.0%)という。一方、女性20代は1割にも満たず(9.0%)、男女差が明らかになったという。世界20カ国・地域におけるSDGsの平均認知率は51.6%で、とりわけASEANにおける認知率が高く、ベトナムでは80.7%、フィリピンでは70.3%であり、最も低いフランスでも24.7%であったことから、日本の14.8%という認知率の低さは際立っているという。

性年齢層別の認知率 (%)	
性別	年齢層
全体平均 (n=1400)	14.8
男性	10代
	20代
	30代
	40代
	50代
	60代
	70代以上
女性	10代
	20代
	30代
	40代
	50代
	60代
	70代以上

参加学生からの声

当団体の企画には、Sustainable Week実行委員会メンバーはもちろん参加団体29団体のメンバーや当日来場来てくださった学生など、多くの学生が参加した。その学生たちが、当団体の企画に参加することで何を得ることができたのか紹介します。



社会問題について考えるようになりました。低回生や他団体を巻き込むことの難しさに気づき、色々と考えたので、物事をいろんな方向から見ることが出来ました。

スポーツ健康科学部 2回生

当団体事前・事後アンケート結果より

当団体が独自に調査したアンケート結果では、「SDGsの関心度」が「Sustainable Week 2018」開催後では61%と日本のSDGs認知度よりもはるかに上回る結果となった

(図1) また、「SDGsの理解度」に関しては、本企画を通じて、約半数の学生にSDGsをある程度理解していただくことができた。(図2)

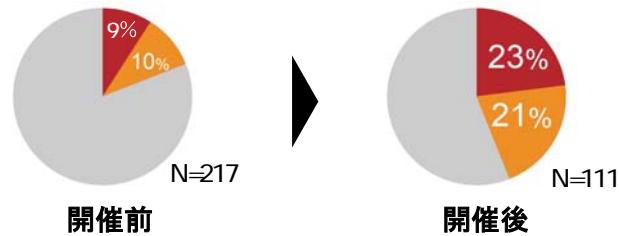
今後は、SDGsの認知度が90%を超えることも目標に活動を続けていきたいと考えている。

図1：SDGsに関心がありますか？ ■興味がある □少し興味がある



約6割の学生がSDGsに関心持っている

図2：SDGsを理解していますか？ ■詳細まで理解 □少し理解



約半数の学生がSDGsをある程度理解している

自分達の研究を、何も知らない方から客観的にどう見えるのかがわかった。人にお願いしながら、協力してもらう力がつきました。他学年、他学部の方ともたくさん交流することができ、とても楽しかったです。技術などの持続可能性などをしつかり考えることの出来る人になりたい。



理工学部 4回生